



ニッポン
ドクター和の
臨終図巻

仕事で月に何度か東銀座に行くことがあります。地下鉄の駅を降りればそこは歌舞伎座。現在は、2013年に竣工(しゅんこう)された五代目です。初代が建てられたのは明治22(1889)年。火災や震災、戦争で姿を変えながら生き続けてきたこのたたずまいは、歌舞伎の歴史そのもの。数多くの役者を育て、見届けてきた建物は、この人の訃報が流れた日、静かな哀しみに暮れているように感じました。

歌舞伎俳優 市川猿翁



323
心臓のリズムが乱れ、通常の心拍数から逸脱することを不整脈といいます。一言で不整脈といっても、脈が速くなるタイプの「頻脈性不整脈」、遅くなるタイプの「徐脈性不整脈」など多くの病態があります。加齢とともに増加するの「心房細動」というタイプです。

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛い方』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

危険でない不整脈は誰にでもありますが、めまいや倦怠(けんたい)感、息切れ、胸痛や気持ち悪さが伴うようであればすぐに病院を受診してください。わが国では、80歳以上の3%の人に心房細動が見られます。心房細動により心室のポンプ機能が低下して心不全に至ったり、心臓の中に生じた血栓が脳に飛んで詰まることもあります。

猿翁さんは2003年、博多座で公演中に体調不良を訴え、脳梗塞と診断されました。晩年はパーキンソン病も患っていました。脳梗塞と診断されて以降、復帰

「宿命」に生きた革命児

父と子は過去の断絶と愛憎を乗り越え、芝居のために一つの方向を向いていく。歌舞伎の世界に生まれた人間にしかわからない「宿命」というものがあり、そのために役者は人生を丸ごと差し出すものなのかと、感銘を覚えました。あれから10年。息子の照之さんは市川中車さんとして、お孫さんは市川團子さんとして活躍中です。猿翁さんの訃報が発表された翌日もお二人は京都・南座に立ち拍手喝采を浴びました。生きの哀しみ、無常が凝縮されている歌舞伎の世界。だからこそ、人を魅了してやまないのでしょう。

を目指すものの表舞台に立つことはほとんどなく、演出に回っていたといいます。猿翁さんが倒れた10年後、2013年にNHKスペシャルで放送された『父と子』というドキュメンタリーをたまたま僕は見ました。苦しいリハビリに打ち込む猿翁さんが、その一方で、歌舞伎への進出を決意した俳優で息子の香川照之さんに稽古をつける壮絶な日々。